

## 司馬江漢と葛飾北斎

## — 中野好夫先生の講演から —

今秋、開館20周年を記念して開催した『富士の絵——鎌倉時代から現代まで』は、大変ユニークな特別展として好評を得ました。つまり、富士山という単一の主題を扱った数多くの絵を、700年前のも

のから時代を追って流派別に陳列しましたので、各時代の絵画様式のちがいや画家それぞれの個性が、来館者の皆様によく理解できたようです。

この特別展には江戸時代の画家の絵が最も多く展示されましたが、その中に洋風画家司馬江漢の作品が数点ありましたので、去る10月12日に評論家の中野好夫先生に、「司馬江漢と富士山」という題で講演をしていただきました。言うまでもなく、中野先生は英文学者として、あるいは文学、政治、社会一般にわたる評論家として、長年活躍して来られました。しかし、中野先生と司馬江漢との結びつきについては、御存知ない方もあることでしょう。

ところが、日本の近代の文学者で司馬江漢に関心を持つ人は意外に多いのです。たとえば、かの夏目漱石は俳人の正岡子規にあてた手紙のなかで、「頃日来司馬江漢の春波樓筆記を読み候が、書中往々小生の言はんと欲する事を發揮し」と書いています。江漢は洋画の先駆者であったばかりでなく、随筆家としてもすぐれた才能を持っていました。彼は江戸時代の知識人としての漢学、国学、仏教などの教養の上に、西洋の自然科学の知識を加えて、一種独特の人生の哲学を作り上げました。彼の思想は一言でいえば合理的、

批判的な人生論ですが、その底に皮肉と諧謔味があり、社会のすね者としての諦観が認められるところに、なんともいえない魅力があります。近代の文豪をひきつけたのは、彼のこのような一面であったのでしょうか。

中野先生のお話によると、先生は10数年来江漢の人間性に興味を持ち、この洋風画家の業績について調べて来られたとのことでした。先生はすでに「図書」誌（岩波書店刊）や「蘭学資料研究会研究報告」に、主として江漢の書簡を紹介する論文を書いて来られました。最近では文学雑誌「新潮」の本年9月号から、江漢の書簡を紹介する隔月連載を始められましたが、この連載によって先生は今日まで知られている江漢の書簡を全部紹介するおつもりの方です。

司馬江漢は日本の象徴である富士山をこの上なく愛し、それを油絵、銅版画、淡彩画などの題材としてとりあげたばかりでなく、随筆「春波樓筆記」の中に富士山についての美しい一文を残しています。中野先生の御講演は「春波樓筆記」の記事や江漢の富士図における絵画的構成の問題に触れながら、江漢の人間性について論ぜられるというさすがに興味深いものでした。そして、お話しの終りに江漢の富士図と葛飾北斎の風景版画との関係について、示唆深いことをおっしゃいましたので、それをここにご紹介しましょう。

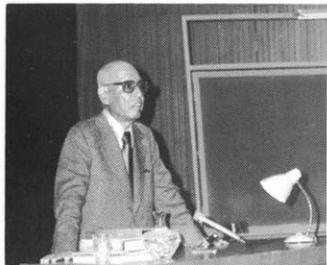
富士の絵は平安時代以来、日本の画家によって数多く描かれてきました。それらの遺品は富士を点景として描きそえた絵巻物や聖徳太子絵伝などの場合を除きますと、大いなる主題としてのこの山に限られた画面内に大きく表わしています。ところが江漢の洋風日本風景図には、江戸の街の一角や鎌倉の七里ヶ浜などから、富士を遠く小さく捉えたものがかなり多く見いだされます。彼は「春波樓筆記」の中に、「富士は駿河の国内より見

たるはあしく、二十里、三十里隔たりて、遠くより望む時は、山を高く見る」と書いていますから、特に遠望したときの富士の秀麗な姿が好きだったのでしょう。しかし、江漢がしばしば遠景に小さく富士を配するのは、やはり彼が洋風画家として、西洋の遠近法による表現に忠実であったためと思われれます。ここにその種の遺作の一例として、彼が天明4年（1784）に作った銅版画、「御茶水景図」をお目にかけましょう。

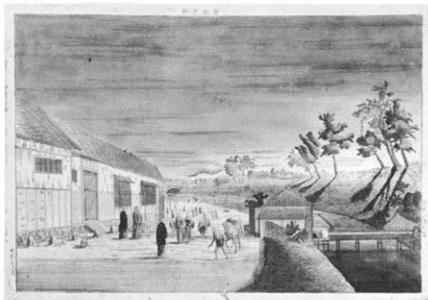
さて、葛飾北斎の代表作である「富嶽三十六景」の連作は、文政5年（1822）から天保年間（1830～1844）にかけて制作されました。北斎のこの種の風景版画に西洋画の影響のあることはこれまでしばしば指摘されてきました。また、文献上の根拠はありませんが、北斎が司馬江漢から洋風画を学んだという説が古くからあります。とにかく、江漢の銅版画は眼鏡絵としてひろく市井に普及し、その油絵の風景画は江戸を始めとする全国の社寺に額として掲げられたから、北斎がそれらから強い刺激を受けた可能性は濃いのです。

一方、北斎の「富嶽三十六景」の連作の中には、ここにお見せする「遠江山中」や「神奈川沖浪裏」のように、主対象である富士山を遠景に小さく、さりげなく表わして奇抜な効果をあげているものがかなりあります。中野先生のご意見によりますと、このような表現は江漢の風景画の影響ではないかとのことでした。北斎の風景版画に江漢から日本の洋風画家の影響が認められる以上、これは当たり前と言ってしまうまでもありますが、その具体的な一例を鋭く指摘されたのは、さすがに中野先生だということ感を深くしました。（成瀬不二雄）

中野好夫先生(10月12日)



御茶水景図 司馬江漢筆



遠江山中(「富嶽三十六景」より) 葛飾北斎筆

